

# まなびのtips

## #1 「ケアレスミス」といっているうちは、ミスは減らない

私の仕事から、小学生のお子さんをお持ちの保護者の方とお話ししていると、「うちの子、いつもケアレスミスばかりして…」とか、「ケアレスミスはどうしたらなくなるんでしょう」と相談を受けることが多い。

まず、子どもは思わぬミスをするものだ。私の小さいころを思い出しても、簡単な計算ミスはしょっちゅうしていたし、答えの写し間違えもよくやっていた。中学生、高校生とだんだん成長するにつれて、こういうミスはよくないな、と自分で考えるようになり、それでようやくミスが少なくなっていくように思う。

私の話はさておき、相談にきた保護者の方に、お子さんがケアレスミスをしてしまう理由を聞いてみると、注意力がなくて、とか、計算が苦手だ、とお話しされることが多い。むろんそれらも理由のひとつであることは間違いない。

しかし、一度立ち止まって、「ケアレスミス」と思っていたものを見直してみよう。どんなミスも「ケアレス」、すなわち、「注意が欠けた」ミスといっているのだろうか。

たとえば、ケアレスミスといわれる計算ミスでよくあるのは、0と6を間違える、というものだ。時間がなくてあわてていたのか、0を書いたはずが、次の瞬間には6と見間違えてそのまま計算してしまう。結果、間違ってしまう。

さて、このミスの原因を少し分析してみよう。「時間がなくてあわてていた」「0を6と見間違えた」…そうか、あわてていたから、0をうまく

書けずに、6と区別できないような字にしまったのか。次からはあわてないようにしよう！あわてなければ、こんな問題、間違えるはずがない…と、これはダメな分析例。

何度も繰り返し同じミスをしているようなら、なぜくり返してしまうのかを分析しなければならぬ。いつも0の書き始めと書き終わりがうまく閉じず、丸の大きい6っぽくなっている。もしそうであれば、これは「直せるミス」だ。たとえば、日ごろから0は丸を大きく書こう、6は丸を小さく書こう、と心がけておけば、たとえあわてていて、0の丸の端が閉じなくても、丸の大ききで0か6かの区別がつく、といったように。

もうひとつ、よくありそうなパターンを示しておこう。ハードな練習をやった疲れあとのテストで、問題は正しく解けたのに、それを解答用紙に写すところで間違えてしまった。疲れていて、集中力が散漫になってしまった…。

これは確かに「ケアレス」なミスかと思う。集中力がなくなってしまうことによる注意力の欠如。よくあることだろう。先の例では、練習で疲れてということだが、睡眠不足という理由でも同じようなミスが起り得るかもしれない。

では、こんな場合の対策はどうしたらよいか。もちろん、テスト前にはハードな練習などせず、または、夜更かしなどせず、万全の体調で臨む。これができるが一番いいのだが、そうもいかない場合だつてたくさんある。

ひとつの解決法は、集中力の強弱をつける、と

いうことだろう。最低限、集中しなければならぬ部分をちゃんと押さえる、ということだ。たとえば問題が解けていても、回答用紙に記入するところで写し間違えてしまえば点数はもらえない。マークシートの記入をずらしてしまつたら0点なわけだ。自分が求めた答えを解答用紙に記入するという最後の段階こそ、最大の集中力で臨むべき、と知っておくことが大切だ。

ミスのパターンを見抜き、たとえミスが誘発されやすい状況においても、ミスをしづらくするような対策が取れるものは、「ケアレスミス」とは言わない方がいい。「ケアレスミス」という言葉には、「注意深く取り組み解けていた」という感情がひそんでいることを忘れてはいけない。「ミスをした」という事実を、正面からとらえることを放棄してしまっている言葉なのだろう。

そして、お子さんにも「ケアレスミスだね」というのはちゃんと考えてからの方がいい。子どもも「ケアレスミス」とはミスに対する免罪符、と認識していることが往々にしてある。「ケアレスミス」といっているうちは、ミスは減らないのだ。

〔筆者〕木村 浩(きむら・ひろし)

1973年生。東京大学卒、同大学大学院修士・博士課程修了。東京大学博士(工学)。東京大学講師、准教授などを経た後、2018年に町田市成瀬で学習塾「学び舎 たけむら」を開校。同塾代表/国語講師。

武道にも造詣が深く、天通合気道 師範五段。首都圏の6つの教室(湯島教室・町田教室・横浜ハデイ教室・赤坂教室・高校生大学生教室・健康法永山)、2つの大学(國學院大学天通合気道同好会・東京大学合気道会)で指導する。文武両道を旨とする。